

『法哲学入門』

長尾龍一 著 講談社学術文庫 1,008 円 (税込)

興味深い挿話を通して考える 法と正義とは何か

会員 丹羽 裕貴 (60 期)

「法哲学」というと敷居が高く、難解なイメージがある。

この本は、ケルゼン、ホッブズ、マルクス、デカルト、ヘーゲル、老子、荀子等々…名前は聞いたことはある又はその著作を手には取ってみるがその内容や主張について知ったかぶりも出来ない面々の文章や言辭が引用される一方で、ガリヴァー旅行記、シャーロック・ホームズ、かぐや姫、新聞の投書欄、古今亭志ん生等々…と比較的親しみやすい題材を採り上げ、様々な譬え話、挿話やエピソードを織り交ぜながら、法哲学のテーマ・論点を軽妙に読みやすい文体で読者を飽きさせないように語ってくれる（あまりに挿話が面白すぎて何が論じられているのか見失ってしまうこともある）。

第5章「実定法を超えて」は、古典的正義の定式「各人に彼のものを」、「正義」に対する懷疑、自然法論等をテーマとする。同章では、ある田舎町の女子高生のエッセイが「少女の正義」として紹介される。少女は、「女の子の前ではギアギア騒いでは、男の子の前に出ると態度を変えていちゃつく女の子」を見ると

“憎しみ”を持ち、「男の子なんて外見しか見ない」「男の子なんて、あんな女の子達の本性を知ったら…」「自分は、あんな女の子達とは違うんだ」と正義感に「心を燃え立たせ」ている。「少女の正義」とは、「少女」（女子高生）が信じる「少女たちはその外見でなく本性の価値に応じて男子に愛されるべきだ」という正義の規範である。…その後、この「正義」を「負の自己顕示」と位置づけて自ら超越した少女は、「同志を肅清するたびに正義の血を沸かして感涙にむせぶ『正義の味方』の大人たちをはるかに超えて成長」する。この本は、少女の成長を、「正義」への懷疑、「他者との平和的共存と正義」という深遠なテーマに見事に結びつける。

この本には、「少女の正義」以外にも感心させられる譬え話、思わず笑ってしまうような挿話が山ほどある。学生時代に法学部に在籍しながら、ろくすっぽ基礎法学を学ばなかった不真面目な自分にとっては、法と正義とは何かを、アカデミックに(?)考えることのできる、うってつけの一冊であった。

